

# 接続詞の指導について

## —「指示語を含む複合接続詞」と「談話を構造化する接続詞」—

俵山雄司

キーワード：接続詞、一語化、談話構造、機能重視の指導、読解の指標

### 1. はじめに

非母語話者に対する日本語教育において、指導の難しい項目として挙げられるものに接続詞とよばれる一連の語群がある。接続詞の指導を難しくする要因としては、「そして、それから、それに」のような類義表現の使い分けの難しさや、「でも、しかし、だが、しかしながら」のような文体によるバリエーションの習得の難しさなどがある。また、学習段階が進み、複雑な内容の長い文章を書いたり、読んだりするようになってくると、文と文の間の論理関係を示す接続詞の重要性は、文章の理解・産出の両面においてさらに増してくる。特に、学位の取得などのため日本語で論文やレポートなどのまとまった思考を論理的に表現する文章を書く場合、接続詞の適切な使用は不可欠なものである。

接続詞の指導における、類義表現の使い分けの問題は日本語学習の初級段階から存在する。例えば、海外技術者研修協会編集の『新日本語の基礎Ⅰ』では、「それから」が第6課、「そして」が第8課と早い段階から登場してくる。

(1) きこのうの 晩 何を しましたか。

…日本語を 勉強しました。 それから 手紙を 書きました。

(2) A： きこのう 田中さんの 恋人に 会いました。

B： そうですか。 どんな 人ですか。

A： きれいな 人です。 そして たいへん いい 人です。

そして、第11課では早くも類義表現の使い分けが問題になるような文章が登場する。

(3) わたしは ナロンです。 ことし 5月に タイから 来ました。 今 研修センターに います。 センターに いろいろな 国の 研修生が います。 今 全部で 170人ぐらいい います。 タイの 研修生は 15人です。

わたしは このセンターで 6週間 勉強します。 それから 名古屋の 会社で 実習 します。 日本に 1年ぐらいい います。 そして 来年 4月に 国へ 帰ります。

(3) では「それから」と「そして」が文章中で同時に使用されている。この場合双方とも出来事間の時間的継起関係を示しており、相互に入れ替えが可能となっている。この継起関係をあらわす「それから」は第6課の「それから」と同じなので、学習者もスムーズに理解できるだろう。しかし、ここで出てくる継起関係をあらわす「そして」は、第8課で登場した「そして」が持つ、ことからの並列的な関係を示すものとは異なる。このような状況で、学習者はおそらく以下のような疑問を抱くであろう。

- 1) 「そして」には時間的継起関係を示すはたらきがあるのか。
- 2) 「それから」にも、ことからの並列的な関係をあらわすはたらきがあるのか。
- 3) 「それから」と「そして」は全く同義の表現なのか。

このように、接続詞は日本語学習の初期の段階から既に問題が出てくる。この類義の接続詞の使い分けの問題や文体によるバリエーションの問題は、教師・学習者双方にとって頭の痛い問題であるが、一方では教師や学習者の注意を引きやすい問題でもある。しかし、接続詞に関する問題には、これらとは異なり、教師・学習者の注意を引きにくいものがある。本稿では接続詞の学習・指導を困難にしている要因のうち、教師・学習者の注意を引きにくいのがゆえに、従来ほとんど触れられてこなかった「指示語を含む複合接続詞」と「談話を構造化する接続詞」の存在に焦点をあて、この学習・指導の困難さを克服するためにはどのような対策を取ればよいのかについて考える。また、併せて、それをふまえて筆者が行った実践を報告する。

## 2. 接続詞の指導を困難にする要因

1 節で接続詞の指導を困難にする要因について少し触れたが、ここでは接続詞の指導について論じている青木他(1994)を見た後、本稿が目にする「指示語を含む複合接続詞」と「談話を構造化する接続詞」が接続詞の指導においてどのような難しさをもたらしているのかを、具体例にもとづいて考えていく。

### 2.1 青木他(1994)

接続詞指導の難しさについては青木他(1994)が以下の3項目をその原因として挙げている。

- 1) 教師側の意識
- 2) 接続詞
- 3) 接続詞教材

1) の「教師側の意識」というのは、教師が持っている「接続詞は二文間の論理関係を表

すものであり、そこに言語間の違いはあまりない。また、英語と比較して、日本語ではこのような論理関係を接続詞で示すことはあまり一般的でない。したがって、接続詞は日本語学習にとってそれほど重要ではなく、むしろ学習者の接続詞の過用を注意すべきである」(p.3) という意識のことで、これが接続詞の指導を困難にしていると述べている。2) の「接続詞」は、論理関係のみならず、「話し手の意識、前提、含意、背景知識」(同上) など複雑な要素が絡んでくる接続詞の用法の不明確さのことである<sup>1)</sup>。3) の「接続詞教材」とは、接続詞の使用条件の説明が難しいことから、教材での説明は限定的で習得は学習者まかせとなっていること、また、接続詞にスポットを当てた教材でも、意味・使用条件・文体情報などの説明が中心で、運用面までは手が届かないということである。青木他(1994)の分類は、接続詞の指導の難しさを言語形式に関連することのみならず、教師や教材という学習者を取り巻く諸要素まで勘案している点でマクロ的なものと言えよう。

ここまで青木他(1994)の内容について紹介してきたが、以下で取り上げる「指示語を含む複合接続詞」「談話を構造化する接続詞」の存在についての言及はない。その理由を考えると、まず、「指示語を含む複合接続詞」については、語構成上接続詞として取り上げにくく、学習者はもとより、教師によってもその接続機能への注目がなされにくいからである。また、「談話を構造化する接続詞」に関しては、青木他(1994)が述べている「接続詞は二文間の論理関係を表す」という素朴な観念が、接続詞と談話構造との関連に対する気づきを阻害するからだと考えられる。

以下では、この「指示語を含む複合接続詞」の存在と「談話を構造化する接続詞」の存在について説明を加える。

## 2.2 指示語を含む複合接続詞の存在

指示語を含む複合接続詞についてみる前提として、まず、接続詞の語構成について若干触れておきたい。現代日本語の接続詞の語構成について、馬場(1993)は「本来的に接続

---

<sup>1)</sup>市川(2000)は誤用分析の観点から接続詞を扱い、接続詞の誤用を大きく以下の6種に分類している。これらは、接続詞指導の難しさを、実際の現れという面から捉えたものと見ることができる。

(S1=接続詞の前文、S2=接続詞の後文)

- A 接続詞そのものに関する誤り
- B 主語・主題(S2において、接続詞のあと、主語・主題が必要なのに、脱落している誤り)
- C 副詞・副詞句、説明句(接続詞の後、副詞、または副詞句、説明句が必要なのに、脱落している誤り)
- D 助詞(接続詞によって介在される、S1とS2の意味により、適切な助詞(特に取り立て助詞)が使えない誤り)
- E 文末表現
- F 文体

詞であったものではなく、「すると、したがって」などのような二語以上の複合、あるいは、「また、および、が」などのほかの品詞からの転成によってできている」(p.7)と述べている<sup>2</sup>。確かに、一般的に「接続詞」と呼ばれているカテゴリーには、品詞論では必ずしも純粹な接続詞とはいえないものが数多く含まれている。

- (4) 阪神が18年ぶりに優勝した。しかし、街は思いのほか静かだった。(接続詞)
- (5) 持ち帰り弁当など「中食」産業の成長が目立つ。実際、利用している人をよく見かける。(副詞)
- (6) 兄は結婚している。一方、弟はまだ独身だ。(名詞)
- (7) 試験の前日は徹夜で猛勉強した。その結果、試験に合格した。(連体詞+名詞)

(4)の「しかし」はともかくとしても、(5)の「実際」、(6)「一方」、(7)「その結果」に関しては、母語話者でも意見が分かれるところであろう。また、「しかし」も決して本来的な接続詞ではなく、長期間の使用の後に一語化・文法化し、接続詞として認められるようになったものと考えられる。しかし、ここに挙げた「接続詞らしくない接続詞」は特に指導の難しいものではない。(5)の「実際」、(6)の「一方」は、それぞれ副詞、名詞として解釈を行っても、文意を誤って読み取ってしまう可能性は少ないと考えられる。同様に、(7)の「その結果」も「その」と「結果」という二語からなる連語として分析的に解釈を行い、それぞれの意味を合算すれば、「その結果」という言語形式の意味に辿り着くことができる。だが、二語以上によって構成されている接続詞の中には、以下の(8)(9)のように、分析的な解釈を行っても当該の言語形式の意味には到達しないものが存在する。

- (8) 現在の製法は、石炭を熱処理したコークスと、鉄鉱石を焼き固めた焼結鉄を高炉に入れ、高熱で酸化鉄から酸素を取り出して還元する。製鉄所に、コークス工場と焼結工場はつきものだった。それが、熔融還元では、石炭と鉄鉱石を直接炉に入れる。これほど省エネルギー、コスト安、環境重視の製法はない。(浜田1993)

(8)の第三文の最初に登場する「それが」は逆接の接続詞に分類されるものである<sup>3</sup>。この場合、指示語「それ」+格助詞「が」と分析的に解釈してしまうと、一語化した接続詞「それが」の持つ逆接の意味にはならない。それどころか、指示語「それ」の指示対象を先行文脈から探し出してしまい、それをガ格名詞として述語「入れる」と関連づけて解釈してしまう、といった明らかな文意・文脈の取り違えにもつながる恐れがある。

<sup>2</sup> 森岡(1973)も接続詞を「事実上すべてが他の語もしくは辞からの転成」(p.15)と捉えており、その語が接続詞に完全に転成しているかの厳密な判断は困難だとしている。

<sup>3</sup> 浜田(1994)は、接続詞「それが」について、「直前のP部の内容から予想される結果が後続のQ部の内容と異なっていることを、話し手の判断を交えず事柄の生起の順に述べていく場合(p.67)」に用いられるとしている。

- (9) ニューヨークでも切符がとれないほどの評判だそうだが、わかるような気がする。アニメの「ライオンキング」と違って、生身の俳優がライオンやハイエナにも扮する。それも縫いぐるみではなく、人間が人形や仮面、竹馬、影絵を使って、動物をアニメードする（生命を吹き込む）のだから、観客の共感を生むわけだ。

(伊藤 2000)

上記(9)の第三文の文頭で用いられている「それも」は「さらに」「そのうえ」などの接続詞で置き換えることが可能であり、一語化した接続詞としての用法を持つ<sup>4</sup>。この場合も、やはり指示語「それ」+とりたて詞「も」というように分析的に捉え、「も」が言外に暗示する事柄や事物を想定しようと、文意を読み誤ってしまうことになる。

日本語教科書にも、これらの形式を含んだ文章がある。水谷(1987)の『総合日本語中級』の中には、ここで紹介した二つの接続詞が一文中に同時に出てきている。

- (10) 脚本家の早坂暁さんが、「僕が器量が悪いのを母が気にしていて、めがねをおかけ、といつも言っていた」と語っていたのを聞いた。めがねは知性、インテリといったイメージに結びついているから、男がめがねをかけるのは、昔からむしろプラスになってきたふしがある。

だが、女性にとって、以前めがねは嫌われこそすれ、プラスになんかにはならなかった。めがねをかけた女、つまり知性的な女性をかつての社会は、かわいい女ほどには望んでいなかったのである。

それが最近では、働く女性、それも知的なレベルで男性にひけをとらずに働く女性がまぶしく輝いて見えてきた。ファッションショーでも知的な女性がテーマとして取り上げられ、めがねは「利口そう」に演出するために積極的に使われる。

(『総合日本語中級』レッスン7)

ここで出てくる「それが」「それも」は接続詞として解釈されるものである。母語話者は、この「それが」が、①文頭にある、②述語「見えてきた」の対象をあらわす資格は「知的な女性」である、というようなことを手がかりとして、これを一語化した接続詞として処理する。同様に、「それも」も、前に「働く女性」という名詞があり、それを詳しく述べた記述が後続するということから、これを接続詞として処理していると予測される。しかし、非母語話者は、母語話者に比べ、このような表現に触れる回数が圧倒的に少ないため、同様の処理を行わず、文意を誤読してしまう可能性がある。

<sup>4</sup> 伊藤(2000)は、接続詞「それも」を指示語「それ」ととりたて詞「も」が結びついて文法化したものと捉え、『AそれもB』においてもつばらAを受けてBでもってAを詳細化する(p.331)はたらきを持つと述べている。

「それが」「それも」は、指示語と助詞という二語の複合形式だが、三語の複合形式の中にも、分析的な把握が不可能なものがある。

- (11) 廃藩置県ののち、政府は、日本を欧米諸国のような強国にするため、岩倉使節団の帰国を待たず、富国強兵をめざす大きな改革に取りかかった。／まず、土地の売買を自由にし、だれでも土地の所有者になることができるようにして、所有者には地券を交付した。そのうえで、1873年（明治6年）から地租改正を行い、米の年貢をやめて、土地所有者から、貨幣で定額の地租を取ることにした。こうして、米を基本とした江戸時代の経済のしくみが改められた<sup>5</sup>。 (歴史)

上の例では、「こうして」は、「する」の持っていた動作性を失い、あらたに先行文脈をまとめるといってはたらきを帯びて用いられている<sup>6</sup>。このことは以下の例と比較すると明らかである。

- (12) ここのつまみをこうしてひねると、電源が入ります。

ここまで見てきた「それが」「それも」「こうして」の3つの接続詞は、二語以上の複合形式という語構成のため、独立した文法項目としては取り上げにくく、また、実際取り上げられることの少ない接続詞である<sup>7</sup>。これらは、同じ二語以上の複合という構成をもつ「その結果」などとは異なり、その形式の分析的な把握によって得られた解釈と、一語化した接続詞としての意味との乖離が激しいという点で、非母語話者の読解過程におけるテキスト意味の正確な理解を妨げる可能性があるのである。

## 2.3 談話を構造化する接続詞の存在

ここからは、接続詞の指導を難しくする要因のもう一方、「談話を構造化する接続詞」の存在について見ていく。接続詞は一般的には「二文間の論理関係を表すもの」と考えられているが、実際には、接続詞が二文以上の単位と関わりあい、談話の構造とも密接に結びついているものがある。まず、ここで取り上げるのは、列挙に用いられる接続詞「まず」「また」「さらに」である。これらの接続詞は単独で使われるとともに、列挙の文章で、複数の表現がセットになって、ことがらを並べるのに用いられることがある。

<sup>5</sup> /はここで新たな段落が始まることをあらわす。

<sup>6</sup> 馬場（1998）は、「そうして」「こうして」という表現について、「する」の動作性が薄くなるにつれ、接続詞的な用法が現れてくることを指摘している。

<sup>7</sup> 「それが」に関しては、代表的な教師用文法書である庵・高梨・中西・山田（2001）やグループ・ジャマシイ編（1998）でも立項されており、この中では接続詞としての認知度は他の3つに比べて高い。ただ、語構成上、学習者が分析的把握を行い、文章の読み誤りを引き起こす可能性はやはり高いと予想される。

- (13) 電話には固定電話と携帯電話がある。「2種類も必要なく、携帯電話のみでよいという意見」があるが、私は反対である。まず、携帯電話が使えない場所がある。例えば、デパートの中や地下鉄の構内などでは通信の電波が届かないことが多く、通話が不可能になってしまうことがある。また、携帯電話は健康に影響をおよぼす可能性がある。ある調査によると、携帯から出る電磁波によって脳の病気の発生率が上がるそうである。さらに、携帯電話は、現時点では固定電話より通話料金が高いので、経済的な面で負担が大きい。このように、携帯だけだと様々な不都合がある。だから、携帯電話のみで良いという意見には賛成できない。

上記の例は、文法的に不自然なところはなく、一見何の問題もないように見える。しかし、この文章になんらかの違和感を感じる人もいるかもしれない。それは、このような列挙の文章では、列挙をする前に複数の項目の存在を示す文が存在するのが普通だからである<sup>8</sup>。つまり、「まず」の前に、「これにはいくつかの理由がある。」「理由として次の三つのことが挙げられる。」「理由としては、」などの文や句が必要になってくるということである。特に、専門的な内容を扱うレポートや論文などを執筆する場合、このような文があるとないで、読み手の受ける印象や読解時の負担はかなり変わってくると考えられる。

また、同じ列挙の文章で「第一は…」「第二は…」のような数字を用いた列挙の表現を用いた場合も、列挙をする前に複数の項目の存在を示す文がなければ、やはり同様に違和感を覚える人がいるだろう。

- (14) 電話には固定電話と携帯電話がある。「2種類も必要なく、携帯電話のみでよいという意見」があるが、私は反対である。第一は、携帯電話が使えない場所があるということである。例えば、デパートの中や地下鉄の構内などでは通信の電波が届かないことが多く、通話が不可能になってしまうことがある。第二は、携帯電話は健康に影響をおよぼす可能性があるということである。ある調査によると、携帯から出る電磁波によって脳の病気の発生率が上がるそうである。第三は、携帯電話は、現時点では固定電話より通話料金が高いので、経済的な面で負担が大きいことである。このように、携帯だけだと様々な不都合がある。だから、携帯電話のみで良いという意見には賛成できない。

列挙の文章というのは上で見たように、複数の項目を並べて挙げるものである。ただし、もちろん、好きなものを勝手に並べていいわけではなく、列挙される項目全てが何らかの基準に該当していなければならない。上の例では、3つの項目全てが「電話には、固定電

---

<sup>8</sup> 論文作成を目的とした作文教科書、アカデミック・ジャパニーズ研究会編(2002)では1課を「列挙」の構造の解説と練習に充て、その中の練習問題の文章のすべてに複数の項目の存在を示す文が含まれていることからみて、少なくとも教育的な見地からは、この文は列挙の文章に要求されるものと言える。

話と携帯電話の2種類も必要なく、携帯電話のみでよいという意見に反対する理由」という基準のもとに、集められ、並べられたものである。ここから、列挙される項目を束ねる役目をもつ複数の項目の存在を示す文が要求されるのである<sup>9</sup>。

談話構造と密接な関係を持つ接続詞としては、他に「こうして」がある。「こうして」は先に「指示語を含む複合接続語」の例としても挙げたが、まとめの表現として、歴史的な経緯を述べる談話構造とも密接につながっている。

(15) 仙台市は、江戸時代に大きな城下町として発展した。明治時代になって、国の軍事、行政、教育、金融などの機関が集中して置かれ、東北地方の拠点としての性格を強めていった。／第二次世界大戦のとき、市の中心部は大部分が空襲によって焼失した。しかし、復興に当たって、市街の再建とともに国の出先機関が整備され、東北地方の行政の中心となった。さらに高度経済成長期には、大きな会社の支社や銀行の支店、工場があい次いで進出した。／こうして現在の仙台市の中心部には、行政や企業などの地方を管理する機関が集中している。 (地理)

(16) ロシアでは、戦争が長引き、国民の生活が苦しくなると、戦争や皇帝の専制政治に対する不満が高まった。1917年3月、首都ペトログラード（現在のサンクトペテルブルク）で労働者のストライキや兵士の反乱が起こると、こうした動きは急速に全国に広まり、各地に労働者・兵士の代表会議（ソビエト）が成立した。その結果、皇帝は退位し、帝政はたおれた。しかし、新しくできた政府では資本家の代表の勢力が強く、戦争を続けたので、労働者・兵士の間に不満が高まっていった。農村でも、土地を求める農民の動きが広まった。こうして、11月、レーニンの率いる労働者や兵士が、ふたたび革命を起こしてソビエト政府をつくり、世界最初の社会主義の政府を立てた。 (歴史)

上記の例では、文章の最後の文の文頭にあるまとめの接続詞「こうして」が、後続文で述べられる結果にいたるプロセスを統合するはたらきを担っている<sup>10</sup>。この場合、先行文脈には、時間的前後関係を読みとることが可能な複数の出来事が並べられることになる。言い換えれば、「こうして」がその経過の統合のはたらきを發揮するためには、前に複数の時間的前後関係をもつ出来事が必要になってくるということである。ここでは、「こうして」という形式は、経緯を述べる談話の構造と分ちがちがたく結びついている。このことは、上記の例と、「こうして」が非用となっている学習者の作文とを比較するとより鮮明になる。

<sup>9</sup> 木戸（1999）はこのような文を「複数の理由を述べる予告をするメタ言語的な文」とし、文章構造を判断するやすがとなると述べている。

<sup>10</sup> 馬場（1998）は接続詞化した「こうして」に、「先行文群の内容を要約的にまとめて、結果的狀態を導く」用法があると述べている。

- (17) ハルビン氷まつりは毎年の1月の初めに1ヶ月間にわたってハルビン市で開催されるまつりである。真冬の頃、芸術家たちは松花江から取られた大きい塊の氷をうがったり磨いたりしていろんな物の形をかたどって氷像を作る。主催と運営はハルビン市氷像芸術家博覧会組織などである。この祭りは毎年も(→毎年)世界各地のお客さんを引きつけている。／ハルビン氷祭りは1963年に始まった。当時中国は三年の(→三年連続で)自然災害にあり(→あい)、住民の生活が(→は)まずしかった。住民の生活を豊かにするために、ハルビン市の書記の提唱の元で人々は簡単な道具を使って千あまりの氷塊を作って公園にかざった。文革によって12年間中止されたけど(→が)また1978年から氷まつりが活力を与えられた。／毎年氷まつりで氷像作りのコンクールが行われる。全世界からの芸術家たちが集まって腕を振る。φ(→こうして)ハルビン氷まつりが(→は)だんだん国際化になっていく。(→国際化してきている)

(17) は構成のはっきりした読みやすい作文だが、最後の文が「まとめ」の文として機能していないので、尻切れの印象を読み手に与えてしまう。そこで、最後の文頭に「こうして」を入れてみると、そこまでの経緯がすっきりとまとめられ、締まりのある文章となるのがわかる。

ここまで談話を構造化する接続詞として、列挙の語形式と「こうして」について具体例とともに見てきたが、これらの接続詞を使用する際は、接続詞の前後の文の関係だけでなく、その表現が使用される文章の全体構造をも考慮に入れなければならない。言い換えれば、列挙の語形式を使う際には列挙の談話構造、「こうして」を使う際には経緯の叙述の談話構造を頭に思い描いていなければ、形成された文章は不適切なものになったり、不自然なものになるということである。接続詞のこういった用法を母語話者ではない学習者が自然に習得することは難しいと考えられる<sup>11</sup>。ここで述べたような用法を学習者が意識していない場合、読解においては文脈の取り違え、作文においては接続詞の非用や誤用を誘発するものとなる。

### 3. 指導における対策

接続詞の指導を難しくする要因として、2.2節で「指示語を含む複合接続詞」の存在、2.3節で「談話を構造化する」の存在を示し、具体例とともに説明を加えてきた。ここでは、これらの難しさへの対策として、教室でどんなことに注意して指導をすればいいのかについて私見を述べたい。

まず、「指示語を含む複合接続詞」の指導のためには、形式にとらわれない機能重視の指

<sup>11</sup> 野田(2001)は文法項目の習得について、当該の形と対立する形がある場合に、「文の中だけで決まる対立はやすく、文の外の情報で決まる対立は難しい」との仮説を提起している。「こうして」は、「その結果」などの結果をあらわす表現と対立関係にあり、「こうして」の使用には、前に複数の時間的前後関係をもつ出来事が必要になってくるので、学習者にとっては難しい文法項目だと言える。

導が肝要だと考える。そのためには、まず教師が、「指示語を含む複合接続詞」の用法に対して自覚的になり、また、学習者にも指導の過程でそれらの表現に注意を促したい。

「それが」を例にとれば、まず「それが」には、指示語「それ」+助詞「が」以外にも「それが」という一語化した形式があり、接続詞として逆接の用法をもつことを説明し、学習者の注意を喚起する。その際、「それが」の出現位置が文頭であることや「それが」の後に句点があること、当該の文の中に「それが」以外のガ格名詞句が存在するなどが接続詞だと認定の一応の基準となることを説明するとよいだろう。さらに、「それが」を読解の指標 (marker) と位置づけ、「それが」の後ろの部分は、前に書かれていることと逆のことが述べられており、それがその文章で筆者が主張したいことになっている可能性が高いことを指摘し、積極的な利用を促すということが考えられる。

次に、「談話を構造化する接続詞」の指導のためには、談話構造を意識した指導が求められよう。では、学習者にどのようにして談話構造を意識させるかという点、接続詞と談話の構造の関連を解説するのはもちろんだが、その接続詞の使用を条件とした作文を課すことで、接続詞と談話構造の結びつきを理解させ、定着させるやり方が考えられる。

例えば、列挙の接続詞であれば、ひととおり用法を説明した後に、2.3節で示したような、「ある意見についての賛否を述べる」といった文章の作成を課題として与え、自分の立場を指示する理由を複数挙げるといった条件をつける。そこで学習者が書いてきた文章をチェックし、きちんと理解がなされているかを見るという方法が考えられる。「こうして」に関しては、4節で筆者が教室で行った実践を紹介する形で、指導法について触れたい。

#### 4. 実践報告－談話構造を意識した「こうして」の指導－

3節では指導上の対策について述べたが、ここでは実際に筆者が教室で行った実践を報告する。ここで教授項目として取り上げたのは「こうして」である。「こうして」は「指示語を含む複合接続詞」であると同時に「談話を構造化する接続詞」でもあり、上級レベルの学習者に対しては見て理解することはもちろん、使えるようになることが求められる。指導の手順は以下の3段階に分けられる。

##### 指導手順

- ① 「こうして」を含んだ文章の読解
- ② 接続表現「こうして」の用法の解説
- ③ 「こうして」の使用を条件とした作文

以下、段階ごとに具体的にどんな指導を行ったかを見ていく。

##### ① 「こうして」を含んだ文章の読解

「こうして」は、形態面では典型的な接続詞とは言えないので、典型的な接続詞に比し

て、「接続」の機能への注目がなされにくい。そこで、以下のような「こうして」を含んだ生教材を与え、読解の過程で「こうして」が一語として「接続」の機能を担っていることを確認した。

主産地の始まりは京都・奈良<sup>12</sup>

まず、酒造りの技術が主産地から全国に広まっていった経緯から説明しよう。

平安時代の宮廷のしきたりを記録した「延喜式（えんぎしき）」に、酒を造る役所「造酒司（みきのつかさ）」のことが書かれている。その酒造技術はたいへん高度なもので、複雑な方法がとられていた。

鎌倉時代初期になると、こうした朝廷の酒造り技術は民間に流出し、京都、奈良など人口が集中する土地には「酒屋の酒」が登場した。室町時代中期になると、京都の造り酒屋の発達はめざましく、洛中洛外合わせて342軒も数えられるようになり、「柳酒」など著名な銘柄もでてきた。

また、寺院や神社でも非常に高度な酒造りが行われ、とくに戦国時代後半になると、奈良の諸白酒（もろはくざけ＝麴用の米、もろみ仕込用の米ともに精白した米を使った酒）が「南都諸白（なんともろはく）」と呼ばれ、名声を得るようになった。「董蒙酒造記（どうもうしゅぞうき）」（1677）に、「奈良流は酒の根源といふべし、故に諸流これよりなる」と記されている。

こうして京都・奈良で培われた酒造りの技術は、その後地方に伝わっていき、米の産地や原料米を確保しやすい港湾地、水が良く豊富なところ、城下町、門前町、商業地など人々が集まるところに、次々と新興の酒の産地が誕生した。その多くは中央の権力者が召し上げたり、地方からの贈答品として評判になった。

応仁・文明の大乱によって、京の酒屋が大きな打撃を受けたのを機に、これら「田舎酒」は「地酒」として洛中の市場に進出してきた。

平安時代

↓

鎌倉時代初期

↓

室町時代中期

↓

戦国時代後半

こうして⇒京都・奈良で培われた酒造りの技術は、その後地方に伝わっていき、…、次々と新興の酒の産地が誕生した。

上記の文章を読んで、文や語の意味を確認した後、「こうして」が、読解の指標（marker）

<sup>12</sup> 「地酒のまめ知識」（<http://www.kcat.zaq.ne.jp/jizakeya/jizake-howtoo..htm>）より採った。なお、原文の「です・ます」体を「である」体に改めた。

として利用できることを指摘した。具体的には、「こうして」があり、前に複数の出来事が生じた順で並んでいた場合、「こうして」の後にはその部分の経緯をまとめた結果が述べられている傾向があるということを口頭で伝えた。

## ②接続表現「こうして」の用法の解説

本文を確認しながら、「こうして」の用法を整理して提示した。

1. こうして……た。
2. このようにして……た。

例：1985年からアメリカのレーガン大統領とソ連のゴルバチョフ書記長の会談で話し合いが進み、1987年12月、中距離核戦力（INF）全廃条約が調印され、核軍縮は大きく進展した。さらに、1991年7月、ブッシュ・アメリカ大統領とゴルバチョフ大統領は「戦略兵器削減条約」に調印し、9～10月には戦術核についてもおおはばに削減を行うことで合意した。こうして、米ソ間の軍縮路線が進み、友好関係が強められた。<sup>13</sup>

- 起こった順番に並べられた複数の出来事をまとめる
- 後ろで、前に述べられたことの結果を述べる

## ③「こうして」の使用を条件とした作文

最後に、「こうして」を理解可能から再生可能にするための練習として、以下のような作文課題を出した。ここでは「こうして」と関連づけて「歴史的経緯を述べる文章」によく使われる表現を練習するため、「こうして」以外にも「～になると」「～てきた」<sup>14</sup>などの表現を使用するという条件をつけた。

### 課題

自分でテーマを選び、その歴史的な経緯について書きなさい。

#### 条件

- ①3～4段落の文章で、長さは400字以内とする。
- ②第1段落では、説明するものの概要を書く。
- ③最後の段落で、「こうして」を使って結果としてどうなったか書く。
- ④以下の表現を少なくとも1回ずつ用いること

<sup>13</sup> 『CASTEL/J CD-ROM V1.3』収録の川田侃・尾藤正英・田邊裕他33名（1993）『新しい社会 公民 2章』東京書籍から採った。

<sup>14</sup> 実際の指導では「～になると」「～てきた」などについても文型として提示し、例文とともに用法の解説を行った。

「～なると」「～てきた」「～ようになった」「こうして」

⑤本や雑誌、インターネットを利用してよい。

ただし、以下の情報を忘れずに書くこと

- ・本 本の名前、著者、出版社、出版年
- ・雑誌 雑誌の名前、出版社、出版年、巻・号
- ・インターネット アドレス

この後、学習者が作った「こうして」の用法についての誤った仮説の形成の防止、正しい仮説の強化のため、作文の添削と講評を行った。クラスでは、添削した作文を返却した後、上手く「こうして」を使っている作文をコピーして配布したり、誤用をクラスで共有したりした。「こうして」に関しては、事前の説明を丁寧に行ったせいか、目立った誤用は見られなかった。また、後日別のテーマの作文課題を与えたときにも、「こうして」をまとめの部分で積極的に使おうとする学習者がいた。ただし、(18)のように経緯以外をまとめようとして誤用となっているものがほとんどであった。

- (18) 大学が不足する一方で、大勢の学生は大学進学を希望している現状がある。子供に対する親の期待高い(→期待は高い)。ゆとり教育の(→が)原因で、授業時間は減少していた(→ている)。勉強時間を補うため、「補修班」に通わせ、家庭教師を雇う家庭は増えている。学校の側は教育レベルを確保するために、課外活動や休み時間を削減する傾向がある。こうして(→こうしてみると)ゆとり教育政策は、学生の負担がかえて(→かえって)増加しているかもしれない。

(18)では「こうして」ではなく、「こうしてみると」などがまとめの表現として適当だと考えられる。他に適当なまとめの表現を知らず、習ったことのある「こうして」を過剰に適用してしまったことがこの誤用の原因と考えられる。このような誤りを防ぐためには作文などを課す際に、意見文、説明文などそれぞれの文章のタイプにあったまとめの表現を紹介し、練習しておくといったやり方が有効であろう。「こうして」以外のまとめの表現には、「要するに」「つまり」などの換言の表現、「このように」「以上のように」などの指示語を含む表現があり、他のまとめの表現との異同の説明や提出順序なども今後の課題として考える必要があるだろう。しかし、活動全体として、学習者のまとめの表現への意識が高まったという点で一定の成果があったと感じた。

## 5. まとめ

本稿では、日本語教育において指導の難しい項目の一つであるとされる接続詞について、その指導を困難にする要因について考え、従来言及されていなかった「指示語を含む複合接続詞」の存在と「談話を構造化する接続詞」の存在をあらたな要因として提示した。ま

た、これらに該当する接続詞に関して、具体例を見ながら解説を加えた。そのほか、指導上の対策について筆者の考えを述べ、その考えに基づいて行った実践の報告をした。

今後は、これらに該当する特徴をもつ接続詞個々についての教授方法の考察を、接続詞の意味・用法の記述ともに進めていく必要がある。

#### 【参考文献】

- 青木惣一・青柳久雄・大竹弘子・佐藤つかさ・谷すみえ（1994）「よく使われる接続詞の教材作成と実施の報告」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』17
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 市川保子（2000）『続・日本語誤用例文小事典―接続詞・副詞―』凡人社
- 伊藤晃（2002）「接続表現としての『それも』―情報付加のあり方と文法化の可能性」『立命館文学』588 立命館大学人文学会
- 木戸光子（1999）「接続表現と列挙の文章構造の関係（1）」『文藝言語研究言語篇』36 筑波大学文芸・言語学系
- グループ・ジャマシイ編（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 野田尚史（2001）「第6章 文法項目の難易度」野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- 馬場俊臣（1993）「指示語系接続語と指示語―『そうして、こうして』を例として―」『語学文学』31 北海道教育大学語学文学会
- 浜田麻里（1993）「ソレガについて」『日本語国際センター紀要』3 国際交流基金
- 森岡健二（1973）「文章展開と接続詞・感動詞」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』明治書院

#### 【教科書】

- アカデミック・ジャパニーズ研究会編（2002）『大学・大学院留学生の日本語 4 論文作成編』アルク
- 海外技術者研修協会編（1990）『新日本語の基礎 I』スリーエーネットワーク
- 水谷信子（1987）『総合日本語中級』凡人社

#### 【例文出典】

- 『CASTEL/J CD-ROM V1.3』日本語教育システム研究会
- （地理）川田侃・尾藤正英・田邊裕他 33 名（1993）『新しい社会 地理 2 編』東京書籍
- （歴史）川田侃・尾藤正英・田邊裕他 33 名（1993）『新しい社会 歴史』東京書籍
- （公民）川田侃・尾藤正英・田邊裕他 33 名（1993）『新しい社会 公民 2 章』東京書籍